

# 特別稿

## トモダチ作戦とは なんだったのか

産経新聞東京本社社会部

大竹 直樹  
(おおたけ・なおき)

九年前の東日本大震災で、在日米軍の救援活動「オペレーション・トモダチ（トモダチ作戦）」を取材しました。震災の三か月後、当時の石原慎太郎東京都知事は「立ち直った日本の姿を披瀝すれば、世界中から寄せられた友情や励ましへの何よりの返礼となる」と語り、五輪招致を表明しました。その「復興五輪」を間近に控えた今、トモダチ作戦とは何だったのか、振り返りたいと思います。

震災から三日たった二〇一一年三月一四日夜、孤立状態で支援の手が回っていないかった宮城県南三陸町の介護老人保健施設の上空に、一機の空軍ヘリが飛来しました。真っ暗闇の中、空中でホバリングしたヘリから一人の女性兵士がロープをつたって降り、救援を待つ被災者に日本語でこう声を張り上げました。

「米国空軍です。助けに来ました」  
この女性兵士は、米空軍嘉手納基地

(沖縄県) 第33救難中隊に所属するベロニカ・コックス兵長。日本人の母親と海軍に所属していた父親とのハーフで、幼少期の七年間を神奈川県横須賀市など日本で過ごしました。コックス兵長は普段、デスクワークの情報兵でしたが、トモダチ作戦には通訳として参加し、初めてヘリからの降下も経験しました。

施設の屋上に書かれた「200人 SOS」の文字をみて、「目の前で助

(提供：産経新聞)



●「トモダチ作戦」に参加する隊員の右腕には、「友」「がんばろう日本」と刺繍されたワッペンがつけられていた  
＝2011年3月26日、青森県の三沢基地

けを求めている人がいる。私の身がどうなるかなんて怖くなかった」と言います。施設で救援を待っていた人は「日本語が通じたときはほっとした。あの感動は今も忘れられません」と涙ながらに語りました。コックス兵長はその後ヘリで各地を飛び回り、被災者の声を集約する任務を続けました。宮城県石巻市の小学校では、足を骨折しても「私はまだいい」と搬送を遠慮する高齢男性の姿を見て、「譲り合いの精神」に感銘を受けたと振り返りました。

### 「友」と漢字で刺繍されたワッペンが

在日米軍などによると、作戦には約二万四五〇〇人が参加し、艦船二四隻、航空機一八九機を投入。自衛隊と連携し、震災直後から孤立していた被災地に食料や医療品などの支援物資を運び、行方不明者の捜索やがれきの撤去作業に従事しました。その多くの隊員たちの右腕に「友」と漢字で刺繍されたワッペンが付けられていたのをご存じでしょうか。

このワッペンの存在に気付いたのは、トモダチ作戦を密着取材したときでした。青森県の三沢基地で、第5空母航空団ヘリコプター対潜飛行隊の中佐が「この任務に当たり日本人の助けになれることを誇りに思う」と見せてくれたのです。調べると、米海軍関係者と長年親交のあった日本人が救援活動に感銘を受けて製作したものでした。帰国した隊員のワッペンをみて感動した本国の米軍関係者が追加注文するなど、計約四万枚が原価割れの一ドルで提供されました。報道後、自衛隊関係者からも「士気を高めたい」と約三〇〇〇枚の発注があり、一般向けに約四万枚がチャリティー販売され、一〇〇〇万円以上が義援金として寄付されました。

私がトモダチ作戦に同行したのは震災から二週間後のことです。まだ海面には津波で流されてきた家屋の残骸が無数に浮かんでいました。取材は神奈川県厚木基地から始まりました。「これから放射線を測定します」。午前五時、基地に着くや否や、放射線

測定器を持った隊員に全身を計測されました。福島第一原子力発電所事故を受けた措置とのことで、簡易測定器を常時身につけることも指示されました。隊員には「東京から来たばかりだ」と伝えても、

(提供：産経新聞)

頭上から手、足の裏まですまなく測定器をあてられ、入念に調べられます。日本政府は当時、「半径二〇キロ圏内からの退避」を示していましたが、米政府は原発の半径八〇キロ（五〇マイル）圏内からの退避を勧告していました。

支援物資を満載した輸送機は午前



●米海軍強襲揚陸艦「エセックス」のブリッジ= 2011年3月27日午前

六時に離陸しましたが、目的地は太平洋側の三沢基地（青森県）なのに、大きく日本海側に迂回して飛行しました。原子力空母や原子力潜水艦を運用する米軍には放射線の専門家もいるはずですが、原子力発電所事故につい

(提供：産経新聞)



●宮城県の気仙沼大島から、米海軍強襲揚陸艦「エセックス」の艦内ドックに戻ったLCU(汎用上陸艇)=2011年3月27日午後、三陸沖

ては日本国内の「情報」が信用されていない印象を受け、複雑な気持ちになりました。

八戸沖に展開する第7艦隊のドック型揚陸艦「トーテュガ」では、若い女性少尉に「日本は逆境を乗り越え、

立ち直る力を驚くほど持っている国です」と励まされました。狭い二段ベツドで一夜を明かした後、翌朝、宮城県気仙沼市の沖合に展開する強襲揚陸艦「エセックス」に向かいます。集中治療室や手術室が完備された巨大

な船です。揚陸隊の上官は「病院船を除いて海上最大の病院施設だ」と胸を張りましたが、「日本から要請がありさえすれば、すぐにでも支援できる準備はあるのだが」と表情を曇らせました。伝わってきたのは、震災直後に医療施設を活用できなかったもどかしさ。当時の日本政府と米軍の間に吹

くすま風を感じた瞬間でした。

**トモダチ作戦は絆や礎を強固にした**

福島第一原子力発電所事故から八か月たった一月二日、発電所が報道関係者に初めて公開されました。装着するだけでも息苦しい全面マスクをつけて取材しました。線量の高い建屋内の作業では、さらに重さ一三キロのボンベを背負って作業に当たると聞き、それがいかに過酷な作業か容易に想像できました。免震重要棟内は汚染を防ぐためのシートで覆われていました。緊急時対策室に入ると「日本人の心の誇り一生忘れません」と書かれた手作りの垂れ幕と、全国から寄せられた無数のメッセージが目に入りました。「福島の英雄」とトモダチ作戦に従事する米兵たちの姿が重なって見えました。

震災から九年。トモダチ作戦に従事した隊員はすでに日本を離れました。米空軍嘉手納基地(沖縄県)の第33救難中隊のパイロット、ブランドン・ライス大尉は日本を離れる際、「被災地

で日本人から助け合いの精神を教わった。その感動は今も忘れられませんが」と語り、クリストファー・ウィルソン一等軍曹は「日本の人々が復興に向けて力を合わす姿を見た。その努力があれば、未来につながる道は必ず開けます」と言いました。トモダチ作戦はまさに、かつて激しく戦った日米両国が絆や礎を強固にした共同活動でした。

「復興五輪」を掲げる二〇二〇年の東京五輪・パラリンピックでは、震災の被災地も、熱戦の舞台となります。一九六四年の東京五輪は、東海道新幹線や首都高などのインフラ整備によって戦後復興と経済発展を世界に印象づけました。戦後と震災。くしくも復興という旗印に変わりはありませんが、二〇二〇年東京五輪・パラリンピックが世界に披瀝すべき日本の姿は半世紀前とは異なるはずだ。

未曾有の事故や天災に立ち向かわれわれ日本人の姿から、世界の人々が何かをくみ取ってくれることを願ってやみません。

